

令和5年度 算数科実践・研究計画

部 員	○猿田 千穂子、井谷 紀子、伊藤 智美
-----	---------------------

研究テーマ
個々の問いをもとに、主体的・協働的に学びをつなぎ、数学のよさを見いだしていく子どもを育む学び

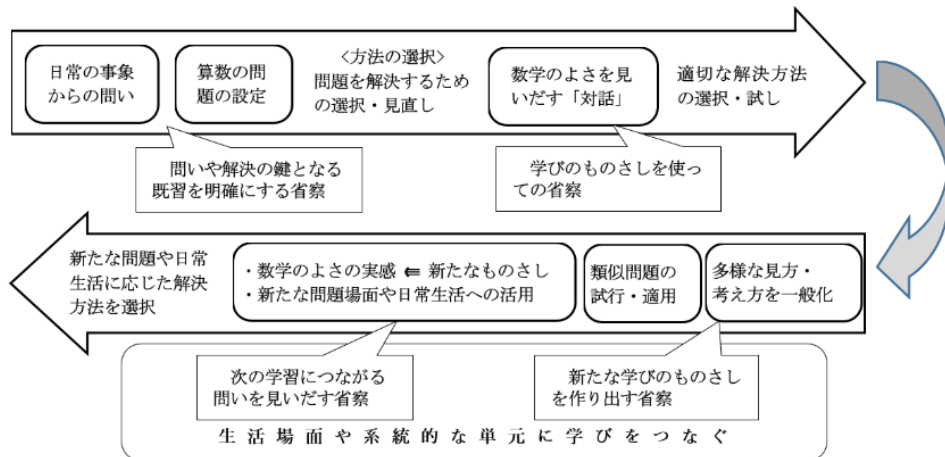
1 研究テーマについて

算数科では、日常の事象を数理的に処理する技能を身に付けること、統合的・発展的に考察する力、簡潔・明瞭・的確に表す力、学んだことを生活や学習に活用しようとする態度を養うことを目標としている。これまでに、問いをつなぎ、身に付けた見方・考え方を選び直したり試し直したりして問題解決し、新たな問いをもつ学習過程を繰り返し行ったことにより、「他の数や場面でも成り立つのか」「もっと速く分かりやすい方法はないのか」など算数科における「学びのものさし」を獲得し、学びをつなぐ子どもの姿を引き出すことができた。しかし、自力解決の際に、問いに対する解決の見通しをもつこと、また協働的な学びにおいて、統合的・発展的に考察したことを個々の学びに生かす点では課題が見られた。

このことを踏まえると、子どもたちが粘り強く解決したい問いを見いだしているのか、問いが自分事になっているかを改めて吟味する必要がある。問いが自分事になっていれば、解決の見通しをもつために「学びのものさし」を用いたり、友達の考えと比べたりしてよりよい解決方法を追究したいという目的が生まれる。そこで、課題を設定する場を工夫する。「学びのものさし」の共有や更新をするための場作りや、個々の課題解決と協働での課題解決の時間設定を工夫した単元構想をする。これらを基に、主体的・協働的に学びを進め数学のよさを見いだす子どもの姿を目指し、実践を積み重ねる。

算数科で目指す自律した子どもの姿

- ・「問いたい問い（生活の中から見付けたもの、解決したい困り感など）」を、仲間との対話をもとに試行錯誤し解決する過程で、考えを修正したり再構築したりしながら、自ら進んで数学的な概念を獲得していく姿
- ・獲得した新しい知識や方法等を次の学習やいろいろな場面で活用し理解を深める姿



図：算数科 自律した学習者を育てる学習のプロセス

2 研究の重点 <○は具体的な取組の例>

自ら数学的概念を獲得し、学びを更新していくための支援の工夫

- 単元の導入で、困り感を見いだしたり、生活の中から算数の問題を見付けたりして課題設定する場や個の学びや協働的な学びを選択できる単元構想の工夫。
- 統合的・発展的に考察したことや個々の学びから生まれた問題を共有する場作りとして、ICTの活用を工夫する。